

青年期の結婚観と子育て観に関する予備的研究

石野 陽子*・清水 寛之**

Yoko ISHINO and Hiroyuki SHIMIZU

A Preliminary Study on Views of Marriage and Child-rearing in Adolescence

ABSTRACT

The present study examined how the Japanese unmarried people, under the current situations of declining birthrate, think about marriage and child-rearing in general, and also their own marriage and child-rearing. Ninety-six male and fifty-five female undergraduate students participated in this study and answered the questionnaires including the 7 items regarding these questions with open-ended formats. The resulting data indicated: (1) the female participants had more realistic and concrete images on marriage in general than the male participants, (2) both they strongly expected their partners to have the Japanese traditional ideas on gender roles, (3) they thought that child-rearing made them feel happy, but required financial costs, namely, much money, with overloading their abilities, (4) the male participants expected to recognize their mental growth with child-rearing, but the female participants had no such expectation, (5) they had conventional values on marriage, and their values on child-rearing were exerted by social influences.

【キーワード：青年期、結婚観、子育て観】

問題と目的

近年、日本では少子化という社会的変化の傾向が著しいとされている。この根拠の一つとされるのは、特殊合計出生率の低下である。特殊合計出生率とは、その年次の15歳から49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、1人の女性が仮にその年次の年齢別出生率で一生涯の間に生むとしたときの子ども数に相当する。この特殊合計出生率は、日本では2005年に1.25であり、人口動態を戦後計数し始めた1947年以降、最低を記録した（厚生労働省大臣官房統計情報部，2006）。しかしその後、2006年には1.32、2007年には1.34、2008年には1.37と上昇傾向にある（厚生労働省大臣官房統計情報部，2009）。その一方で、出生数は2005年の1,062,530名から2006年の1,092,674名、2007年には1,089,818名、2008年には1,091,158名と増減を繰り返している（厚生労働省大臣官房統計情報部，2009；図1）。

このように少子化傾向は、現在、大きな社会問題として認識され、少子化対策・子育て支援に関するさまざまな施策や議論が精力的に進められている。しかしながら、そうした努力が実を結び、出生率・出生数がともに大きく上昇するまでには至っていないのが現状である。

この少子化の問題を心理学的な立場から取り組もうとするとき、社会環境や家族関係、経済状態に加えて、それぞれの個人やカップルがもつ結婚や子育て、生き甲斐など価値観によってなんらかの行動選択がなされた結果

として、長い年月をかけて少子化社会が形成されたという見方をとることができるだろう。

このような、個々人の自由な価値観を尊重したことで結果的に少子化社会が形成された日本に対し、中国においては国の施策によって計画生育、いわゆる一人っ子政策が導入されている。その結果、子ども世代の人口比は急激な減少傾向をたどっている。また、家庭の労働力を期待したり家督制度を重視したりするため女兒の方が少ないという男女比の崩れが進んでいる（中国人口統計年鑑，2006）。以上のような、世代間での極端な人口比と男女比の崩れという事態を重く見た中国政府は、2002

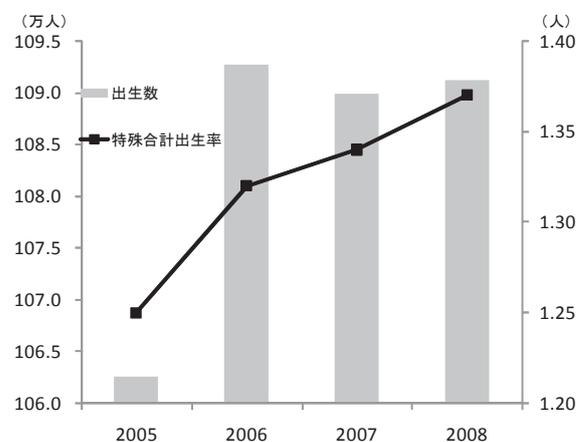


図1 日本の出生数と特殊合計出生率の年次推移（厚生労働省大臣官房統計情報部，2009より筆者が作図）

* 島根大学教育学部 心理・発達臨床講座

** 神戸学院大学人文学部

年に一人っ子政策の緩和をすすめた。この政策の転換については、地域によって人口問題の内容や程度が異なるため、中国全体を一律に変更させるのではなく、緩和の程度や導入の方法を、省、自治区、特別市ごとに任せた。たとえば大都市圏では一人っ子が多いため、一人っ子同士の夫婦は子どもを2人まで産めるように変更された。しかし、先進諸国と同じように出生率は自然な減少傾向にある。たとえば、中国全体の特殊合計出生率は1.8であるのに対して上海は0.8であり、政策転換の意図とは異なり、出生率は上昇していない（中国人口統計年鑑，2006）。

このように、急激な外的な環境の変化によってもたらされた中国における少子化と、個々人の価値観を尊重し選択を繰り返す中でもたらされた日本における少子化は、このあとに続く世代の結婚観や子育て観に影響を及ぼす可能性があるのだろうか。

本研究は、日本と中国とを比較する本調査の前の予備的調査と位置づけ、まず日本の青年に調査を行なう。

現在のような社会環境・社会状況のもとで育った青年たちは、結婚や子育て、家族、仕事、そして彼らを取り巻く制度などの社会環境をどのようにとらえ、また、自身の結婚や子育てについてどのように考えているのだろうか。青年がもつ結婚観と子育て観を自由記述式の質問紙によって調査する。

方 法

調査時期 配布・回収は、2008年9月に行なわれた。

調査方法 調査方法は質問紙法を用いた。大学の授業中に質問紙を配布し、その場で回答を求め回収した。回答時間は20分程度であった。151名に配布、有効調査率は100%であった。

調査対象者 調査対象者は大学生であり、151名が参加した。このうち男性は96名、女性は55名であった。平均年齢は19.88歳(年齢範囲19-28歳)であった。

質問項目 調査に用いられた質問項目は、次の7項目から構成され、自由記述によって回答を求めた。

1. 結婚そのものについて、どのように考えているか
2. 結婚したいと思うかどうかとその理由
3. 結婚したいと思うかどうかの理由や動機、きっかけは何を参考にしているか
4. どういう人と結婚したいか
5. 子どもや子育てそのものについての考え

6. 自身が子どもをもつことへの関心
7. 子どもがいたとすれば、どのような子育てがしたいか
8. 子育てに関する考えは何かを参考にしているか

結果と考察

1. 結婚そのものについてどのように考えているか

「結婚そのものについての考え」について、表1に示す。全体では、(1)「心理的作用がある」(楽しそう、安定しそう、幸せ)(14.75%)、(2)「家族をもつこと」(14.03%)、(3)「一緒にいたい人といることができる」(9.71%)、(4)「自分や家族に責任をもつこと」(7.55%)、(5)「大変そうである」(5.04%)の順で意見が多かった。また性別で比較すると、上記の3項目についてはいずれも高いが、女子青年は「恋愛の延長である」(6.19%)と思う反面、「大変そうだ」、「経済的負担を考える」といった現実的なことを連想する。それに対して、男子青年は「いいと思う」とどこか漠然とした意見が少なからず見られる。これに関連して、石野・清水(2000)が、未来の子どもにどのような者になってほしいかという調査を行なったところ、男子青年はプロスポーツマンや当時花形の職種、ヒーローものなど、どちらかといえば空想的で一見非現実的な将来像を抱く。それに比して女子青年の方が、具体的で堅実的な職種、資格取得指向性など、より現実的な将来像を描いていた。現在、女子青年は男子青年と同様に社会に進出するが、厚生労働省・文部科学省「大学等卒業予定者就職内定状況等調査」によれば、大学新卒者の就職状況をみると、女子青年が96.0%と男子青年の96.6%、平成20年3月卒業予定者の就職内定率(平成20年2月1日現在)は88.7%で、女子青年が88.2%、男子青年が89.2%と、女子青年の方が低くなっており、女子青年の方が若干就職が困難である。このような状況から、女子青年は早くから社会参加の方法を模索し、将来のシミュレーションを行なう機会が多いのではなかろうか。そのような環境要因から、女子青年の方がより現実的で具体的なイメージを描くことが推察される。

2. 結婚したいと思うかどうかとその理由

「結婚したいと思うかどうかとその理由」については、74.17%の者が「結婚したい」と回答しており、「したくない」と答えた者は9.93%にとどまった。

表1 結婚そのものについて、どのように考えているか

	合計		男子青年		女子青年	
	n	%	n	%	n	%
心理的効果がある	41	14.75	24	14.55	17	15.04
家族を持つことそのもの	39	14.03	16	9.70	23	20.35
一緒にいたい人と一緒にいることが出来る	27	9.71	16	9.70	11	9.73
責任をもつこと	21	7.55	16	9.70	5	4.42
大変そう	14	5.04	8	4.85	6	5.31
人生の大きな出来事	13	4.68	8	4.85	5	4.42
経済的負担	12	4.32	6	3.64	6	5.31
恋愛の延長	12	4.32	5	3.03	7	6.19
いいと思う	12	4.32	12	7.27	0	0.00
伝統文化の継承	11	3.96	7	4.24	4	3.54
束縛・制限が新たに生まれる	10	3.60	7	4.24	3	2.65
支えあうもの	10	3.60	5	3.03	5	4.42
新しい生活の出発点	9	3.24	6	3.64	3	2.65
今はまだ	8	2.88	5	3.03	3	2.65
子どもを育てるため	7	2.52	6	3.64	1	0.88
次世代・子どもへ自分のことを継承するもの	6	2.16	4	2.42	2	1.77
個人の自由	5	1.80	4	2.42	1	0.88
義務責務	4	1.44	2	1.21	2	1.77
約束・契約	4	1.44	2	1.21	2	1.77
憧れ	4	1.44	0	0.00	4	3.54
年齢・時期がきたらするもの	3	1.08	2	1.21	1	0.88
他者から公認される	3	1.08	2	1.21	1	0.88
無回答	3	1.08	2	1.21	1	0.88
	278	100.00	165	100.00	113	100.00

表2 結婚したいと思うかどうかの理由や動機、きっかけ

	合計		男子青年		女子青年	
	n	%	n	%	n	%
経済的側面が整えば	47	25.27	29	24.58	18	26.47
心理的作用を考えて	34	18.28	21	17.80	13	19.12
よい相手に出会えたら	25	13.44	11	9.32	14	20.59
子どもが欲しいから	16	8.60	10	8.47	6	8.82
家族がほしいから	15	8.06	12	10.17	3	4.41
したいことや夢をつぶしたくない	9	4.84	4	3.39	5	7.35
年齢・時期がきたら	6	3.23	2	1.69	4	5.88
義務・責務で	5	2.69	5	4.24	0	0.00
社会的信用が得られるから	3	1.61	3	2.54	0	0.00
今の自分では無理	2	1.08	1	0.85	1	1.47
新しい人生の始まりを迎えたい	1	0.54	1	0.85	0	0.00
次世代への継承	0	0.00	0	0.00	0	0.00
伝統文化の継承	0	0.00	0	0.00	0	0.00
無回答	23	12.37	19	16.10	4	5.88
	186	100.00	118	100.00	68	100.00

「結婚したい（あるいは、したくない）理由」については（表2を参照のこと）、（1）「経済的自立ができたのちであれば」（25.27%）、（2）「心理的作用を考えて」（「落ち着きたいから」、「ひとりでは寂しいから」）（18.28%）、

「結婚したい」と考えている。以下に続く理由は、男子青年は、「家族が欲しいから」（10.17%）と答えているのに対して、女子青年は、「よい相手に出会えたら」（20.59%）と、多少意味合いが異なる。男子青年が結婚を、家族を

形成するための手段としてとらえるのに対して、女子青年は自然の成り行きで行なうことが理想的であるととらえている様子がうかがわれる。

また、男子青年のみにみられる義務・責務として結婚をとらえている者もみられる。たとえば、「世間体があるので、しなければならないと思う」、「好きな人と一緒にいられるからとも思うが、そういうことよりも、意外としないダメだからという固定観念があるからとも思う」、「何より結婚という儀式と契約が、好きな人と特別な関係であったり、また幸福の代名詞的な価値観をもっている人がほとんどで、自分もその1人だから」など、従来の固定観念を強く意識している様子が浮かび上がってくる。

一方、質問1「結婚とはどのようなものか」との質問において「次世代への継承」、「伝統文化の継承」があがっていた。では自分が結婚したいかどうかとの質問に対して「次世代への継承」、「伝統文化の継承」との理由があがらないのは、結婚そのものと上位世代を受け継ぐことが直接には関係していないととらえていると考えられる。

3. 質問2「結婚したいと思うかどうかの理由や動機、きっかけ」は何を参考にしているか

「結婚したいかどうかの理由について、特に誰かの意見や様子が参考になっているか」を質問した。この質問に対する結果を表3に示す。まず誰かの意見や様子を「参考にしていない」、つまり、参考にしたと自覚していない者が全体の3割を占めていた。これは具体的なイメージを思い浮かべにくかったということなのか、あるいは単に答えにくかったのかもしれず、質問の仕方を再考する必要がある。

一方、何かを参考にしていると自覚している者の意見では、「過去の両親の記憶」が男女ともに高い。また、女子青年は「現在の両親の様子」を参考にしている傾向

があるが、男子青年は、「現代の世論」や「友人との会話」の中から広く何か影響を受けていると感じているようである。補足ではあるが、その意見が「よい例として参考になった」と答えた者は25.33%（男子青年25.00%、女子青年25.86%）、「よくない例として否定的に参考になった」と答えた者は12.67%（男子青年10.87%、女子青年15.52%）であり、結婚について周囲のよい面もよくない面も取り入れながら、将来について考えている様である。

4. どういう人と結婚したいか

「どういう相手と結婚したいか」という理想像を、質問2「結婚したいと思うかどうかとその理由」の際に、「したい」と答えた者に尋ねた。答えにくかったのか回答数が少なく、回答の内容も非常に多岐にわたっている（表4を参照のこと）。

しかし、強いてあげるならば、男子青年は女子青年に対して、「優しさ」と「家事ができること」、「子どもが好きであること」を求めている。自由記述にも、「家事と子育てがしっかりできる人が理想」、「結婚するなら、私生活完全サポート！みたいな人がイイです」など、良妻賢母を連想させる意見も見られた。

対して、女子青年は男子青年に対して、「収入が安定」しており「家庭を大切にしてくれて」、「優しく」、「尊敬でき」、「頼れる人」を理想の相手として挙げている。自由記述にも、「優しい、頼りになる、いつも家族のことを想ってくれる、大事にしてくれる、尊敬できる人、子どもの見本になれるような人」と明記している者もいた。

今の時点では、総じて結婚相手には、自分に合う個性の持ち主や、あるいは相性を求める者もいる。しかし、それよりもまず、結婚相手の選択については構えができしており、どちらかといえば伝統的な印象をもっている。だからこそ、伝統的な役割観をしっかりともっている相手であることを期待していると考えられる。

表3 結婚したいかどうかに対する意見は何を参考にしているか

	合計		男子青年		女子青年	
	n	%	n	%	n	%
参考にしていない	49	32.67	33	35.87	16	27.59
過去の両親の記憶	21	14.00	9	9.78	12	20.69
現在の両親	13	8.67	5	5.43	8	13.79
現代の世論	12	8.00	9	9.78	3	5.17
友人との会話	9	6.00	7	7.61	2	3.45
街中の家族	3	2.00	3	3.26	0	0.00
過去の家族の記憶	2	1.33	0	0.00	2	3.45
兄弟	2	1.33	2	2.17	0	0.00
親戚	2	1.33	1	1.09	1	1.72
恩師・教師	1	0.67	1	1.09	0	0.00
付き合っている人	1	0.67	1	1.09	0	0.00
友人の家族の記憶	0	0.00	0	0.00	0	0.00
無回答	35	23.33	21	22.83	14	24.14
	150	100.00	92	100.00	58	100.00

表4 どういう人と結婚したいか

	合計		男子青年		女子青年	
	n	%	n	%	n	%
優しい	10	5.65	6	5.61	4	5.71
収入が安定	8	4.52	0	0.00	8	11.43
尊敬できる人	6	3.39	0	0.00	6	8.57
家庭を大切にする	6	3.39	2	1.87	4	5.71
気が合う	4	2.26	3	2.80	1	1.43
ストレスを感じない	4	2.26	3	2.80	1	1.43
家事ができる	4	2.26	4	3.74	0	0.00
子ども好き	4	2.26	3	2.80	1	1.43
頼れる	4	2.26	0	0.00	4	5.71
可愛い	3	1.69	1	0.93	2	2.86
自分をたててくれる	3	1.69	2	1.87	1	1.43
愛してくれる人	3	1.69	2	1.87	1	1.43
支えあっていける人	3	1.69	2	1.87	1	1.43
一緒にいられる人	3	1.69	3	2.80	0	0.00
趣味が合う	2	1.13	1	0.93	1	1.43
自分を理解	2	1.13	1	0.93	1	1.43
気持ちが分かりあえる	2	1.13	1	0.93	1	1.43
かっこいい	1	0.56	1	0.93	0	0.00
楽しい	1	0.56	1	0.93	0	0.00
普通じゃない人	1	0.56	0	0.00	1	1.43
タバコを吸ってない人	1	0.56	1	0.93	0	0.00
おちつく人	1	0.56	0	0.00	1	1.43
良識のある人	1	0.56	0	0.00	1	1.43
気を遣わない	0	0.00	0	0.00	0	0.00
無回答	100	56.50	70	65.42	30	42.86
	177	100.00	107	100.00	70	100.00

表5 子どもや子育てについてどのように思うか

	合計		男子青年		女子青年	
	n	%	n	%	n	%
大変	87	31.99	55	32.54	32	31.07
楽しみ・楽しそう	26	9.56	15	8.88	11	10.68
幸せ	19	6.99	8	4.73	11	10.68
自分の成長につながる	19	6.99	9	5.33	10	9.71
かわいい	17	6.25	9	5.33	8	7.77
大切なこと・責任がある	15	5.51	9	5.33	6	5.83
家族と協力する	12	4.41	10	5.92	2	1.94
大事な存在	11	4.04	7	4.14	4	3.88
次世代へ継承	10	3.68	9	5.33	1	0.97
難しい	9	3.31	6	3.55	3	2.91
すばらしい	6	2.21	6	3.55	0	0.00
良い経験	6	2.21	2	1.18	4	3.88
子どもが好き	5	1.84	4	2.37	1	0.97
中途半端ではダメ	5	1.84	3	1.78	2	1.94
自分の存在意義	5	1.84	3	1.78	2	1.94
喜び	4	1.47	3	1.78	1	0.97
自分が未成熟	4	1.47	4	2.37	0	0.00
嫌だ	3	1.10	2	1.18	1	0.97
不安	2	0.74	1	0.59	1	0.97
きらい	1	0.37	1	0.59	0	0.00
できない	1	0.37	1	0.59	0	0.00
義務	1	0.37	0	0.00	1	0.97
無回答	4	1.47	2	1.18	2	1.94
	272	100.00	169	100.00	103	100.00

5. 子どもや子育てそのものへの考え

「子どもや子育てそのものへの考え」については、(1)「大変そう」(31.99%)、(2)「楽しみ・楽しそう」(9.56%)、(3)「幸せそう」(6.99%)、また、(3)「自身の成長につながりそう」(6.99%)、(5)「かわいいだろう」(6.25%)であった(表5を参照のこと)。

男性には、家族と協力するものであるという意見が上位に挙がるのに対して、女性のごく少数意見であった。

現在は、国の施策としても子育てを男性と女性がともに行なうことが強く推進されている。それにも関わらず、青年期の特に女性にはあまり浸透していないことがうかがえる。この傾向も、どちらかといえば、伝統的な性役割観から子育ては女性が行なうものであると、女性がその観念を持ち続けるために、本当に子育てをしなければならなくなった時に、子育てか就業か、といった選択を迫られるかのような考えを抱くのかかもしれない。

6. 自身が子どもをもつことへの関心

「自身が子どもをもつことへの関心」については、71.62%の者が「子どもをもちたい」と答え、「子どもをもちたくない」と答えた者は16.89%であった。

「子どもをもちたい(あるいはもちたくない)理由」については、表6に示す。(1)「結婚していたら」(14.38%)、(2)「経済的に整えば」(10.46%)、(3)「子どもがいたら楽しそうだから」(9.15%) いたらよいと思っている。男女を比較すると、上位は先に触れたとおりであるが、男子青年は「子どもがいたら教わるが多く」、「ともに成長できる」と考える者がいるのに対し、女子青年にはそのように答えている者がいない。このことは、例えば、上述の質問4「どういう相手と結婚したいか」や質問5「子どもや子育てそのものへの考え」において、男子青年も女子青年も「女性が子育てをするものだ」と考えているようである。これらの傾向と同様で、やはり子育ては女性が主に従事することであって、だからこそ、女性は子育てがうまくできることが自然なことという意見を、女性も男性もごく普通にもっている。同様に、男性は女性とは異なって主に子育てをする立場ではないからはじめから完璧に行なう必要はない。したがって、男性は親になる過程を子どもの成長とともに少しずつ歩めばよいという前提が、男性にも女性にもあると考えられるのではないかと推察される。

表6 自身が子どもをもつことへの関心

	合計		男子青年		女子青年	
	n	%	n	%	n	%
結婚していたら	22	14.38	8	8.99	14	21.88
経済的に整えば	16	10.46	13	14.61	3	4.69
楽しそう	14	9.15	6	6.74	8	12.50
今の自分には無理	12	7.84	7	7.87	5	7.81
大変そう	9	5.88	5	5.62	4	6.25
家族が増える・いる	9	5.88	5	5.62	4	6.25
兄弟有り	9	5.88	5	5.62	4	6.25
かわいい	8	5.23	4	4.49	4	6.25
子どもが好き	8	5.23	7	7.87	1	1.56
教わることが多い・一緒に成長	8	5.23	8	8.99	0	0.00
幸せ	7	4.58	4	4.49	3	4.69
成長を見るのが楽しみ	6	3.92	5	5.62	1	1.56
癒される	5	3.27	3	3.37	2	3.13
生きがい	4	2.61	2	2.25	2	3.13
経済的に無理	3	1.96	2	2.25	1	1.56
育てられる自信がない	3	1.96	1	1.12	2	3.13
子どもがほしい	2	1.31	1	1.12	1	1.56
子育てや出産をしてみたい	2	1.31	0	0.00	2	3.13
自分の時間を大切にしたい	2	1.31	1	1.12	1	1.56
子どもは好きじゃない	1	0.65	1	1.12	0	0.00
女性として	1	0.65	0	0.00	1	1.56
人として	1	0.65	0	0.00	1	1.56
遺伝子	1	0.65	1	1.12	0	0.00
	153	100.00	89	100.00	64	100.00

表7 子どもがいたとすれば、どのような子育てがしたいと思うか

	合計		男子青年		女子青年	
	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%
しつけを十分に行ないたい	28	13.21	16	12.21	12	14.81
したいことをさせる	26	12.26	15	11.45	11	13.58
常識的な	22	10.38	15	11.45	7	8.64
自由	19	8.96	11	8.40	8	9.88
のびのび	13	6.13	5	3.82	8	9.88
元気な	12	5.66	12	9.16	0	0.00
親子のコミュニケーション	11	5.19	7	5.34	4	4.94
優しい	10	4.72	5	3.82	5	6.17
自分で考えられる	10	4.72	8	6.11	2	2.47
人の気持ちの分かる	9	4.25	5	3.82	4	4.94
学力のある	6	2.83	3	2.29	3	3.70
自分の親の子育て	6	2.83	3	2.29	3	3.70
夫婦や家族で協力して	5	2.36	4	3.05	1	1.23
社会に役に立つ	5	2.36	5	3.82	0	0.00
様々な体験をさせたい	5	2.36	3	2.29	2	2.47
スポーツ	4	1.89	3	2.29	1	1.23
愛情	4	1.89	1	0.76	3	3.70
思いやりの持った子	3	1.42	1	0.76	2	2.47
一緒に楽しく成長	3	1.42	1	0.76	2	2.47
厳しく	3	1.42	2	1.53	1	1.23
無回答	8	3.77	6	4.58	2	2.47
	212	100.00	131	100.00	81	100.00

表8 子育てへの考えは何かを参考にしているか

	合計		男子青年		女子青年	
	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%
受けていない	33	21.85	26	27.08	7	12.73
親	42	27.81	26	27.08	16	29.09
家族	12	7.95	5	5.21	7	12.73
自分自身	8	5.30	6	6.25	2	3.64
一般の親	6	3.97	2	2.08	4	7.27
本・ニュース	4	2.65	3	3.13	1	1.82
友人の親	3	1.99	1	1.04	2	3.64
一般の人	3	1.99	1	1.04	2	3.64
親戚	1	0.66	1	1.04	0	0.00
祖父母	1	0.66	1	1.04	0	0.00
一般の子ども	1	0.66	1	1.04	0	0.00
教師	1	0.66	0	0.00	1	1.82
身近な人	1	0.66	0	0.00	1	1.82
兄弟	0	0.00	0	0.00	0	0.00
兄弟の子ども	0	0.00	0	0.00	0	0.00
友人	0	0.00	0	0.00	0	0.00
友人の子ども	0	0.00	0	0.00	0	0.00
わからない	2	1.32	2	2.08	0	0.00
無回答	33	21.85	21	21.88	12	21.82
	151	100.00	96	100.00	55	100.00

7. 子どもがいたとすれば、どのような子育てがしたいか

「子どもがいたとすれば、どのような子育てがしたいか」ということについての結果を表7に示す。

(1)「しつけを十分に行ないたい」(13.21%)、(2)「子どもがしたいことをさせたい」(12.26%)、(3)「常識的に良いことと悪いことをしっかりと教えたい」(10.38%)、(4)「干渉しすぎず自由に育てたい」(8.96%)、(5)「個性に合わせてのびのびと育てたい」(6.13%)であった。また、「親子のコミュニケーションをしっかりとりたい」、「自分で考えられる人に育てたい」、「人の気持ちのわかる人に育てたい」といった、近頃特に注目されている、コミュニケーション能力や社会性、あるいは自主性などを重んじている様子であった。

8. 子育てに関する考えは何かを参考にしているか

「子育てに関する考えは何かを参考にしているか」についての結果を表8に示す。「何からも影響を受けていない」と自覚している者が21.85%いた(男子青年27.08%、女子青年12.73%)。これも質問3「結婚したいと思うかどうか」への考えに参考としたことを尋ねた時の結果と同様、具体的にイメージされなかったということなのか、あるいは答えるのに困り列挙しにくかったのかも、あるいは質問の仕方を再考する必要がある。

一方、何かを参考にしていると答えた者の意見としては、(1)「親」(27.81%)、(2)「家族」(7.94%)ということであった。

結婚に関しては、特に男子青年は世論や友人の意見なども参考にしているが、子育てに関しては、特に男子青年の方が非常に身近な他者を参考としているようである。

結 論

少子化社会のもとで育った青年たちは、結婚や子育てに関してどのようにとらえ、また、自身の結婚や子育てについてどのように考えているのであろうか。青年がもつ結婚観と子育て観を調査し、考察した。

1. 結婚についての将来像

結婚そのものへの考え方、また、結婚したいと思うかどうか、どのような人と結婚したいかを尋ねた。その結果、男子青年よりも女子青年の方がより現実的で具体的な将来像を抱いていることが明らかとなった。また、男子青年は女子青年に対して優しいことと家事ができること、子どもが好きであることを期待している。一方女子青年は男子青年に対して、収入が安定しており家庭を大切にしてくれて優しく、尊敬でき頼れる人を期待している。つまりは、結婚相手としては、伝統的な性役割観をもった相手を理想としていることも明らかとなった。

2. 子育てについての将来像

若い未婚の青年は子育てに関して、総じて、楽しいだろうし幸せなことであって、非常に楽しみにしているようである。だが、経済的負担や自分の能力、社会経験、立場からすると、今の自分には非常に難しいことであると考えている。

また、昨今よく聞かれる「子どもとともに、親も成長する」という考え方について焦点を当てると、男子青年からは多く見られたが、女子青年からは全く見られなかった。つまり、女子青年は「子どもとともに、親も成長する」という考え方と自分のこととは切り離して考えていた。このことは、子育ては女子青年が主に従事することであって、だからこそ、女子青年は子育てがうまくできることが自然なことという考えを、女子青年も男子青年もごく普通にもっていることのあらわれであることが考えられる。だから、男子青年は、親になる過程を子どもの成長とともに少しずつ歩めばよいという前提が男子青年に、ともすれば女子青年にもあると考えられる。

3. 将来を思い描くとき、何を参考にしているか

結婚については、男子青年は両親の過去の姿の他に、友人の意見や社会や世論を参考にしている。一方、女子青年は両親や家族など、ごく身近な者の影響を受けている。比して、子育てに関して、男子青年は両親や家族などごく身近な者の影響を受けている。また、特に子育てに関しては、親子のコミュニケーションをしっかりとりたい、自分で考えられる、人の気持ちのわかる、といった、近頃特に重要視されている、コミュニケーション能力や社会性、あるいは自主性などを重んじており、一般社会からの影響を非常に受けていることが明らかとなった。

このように結婚への考えは総じて肯定的であり、経済的に自立ができるなど条件を整えば行ないたいと考えているものが多い。子育てに関しても、結婚よりはやや消極的であり大変そうだと思うものの多くの者が子育てを行ないたいと考えている。また、結婚には伝統的な性役割観が影響を与えているが、子育てをどのように行なっていくべきかについては社会の動向もよく見聞きし、自身の将来像に取り入れてようとしており、非常に進歩的な、時代に即した子育てを使用していることが伺える。しかし、子育てを行なうのは女性の役割であると男子青年も女子青年も考えており、男子青年はどちらかといえば消極的で補助的な役割であると男子青年は考えていた。

今後は、中国において同様の調査を行ない、結婚や子育てについて非常に社会環境の異なる青年が、どのような考えをもっているのかを精査したい。また、ここ30年の結婚率は低下傾向にある(総務省, 2005)ことを鑑みれば、これ以降に結婚観・子育て観が変化することも容易に考えられる。学生の頃の肯定感がそれ以降、どのようなことに影響を受けるのかをさらに精査する必要があるだろう(石野・清水, 2009)。

引用文献

- 石野陽子・清水寛之（2000）. 未来展望と自己認知に関する調査研究（2）一次世代への未来像から見る性役割観— 日本発達心理学会第11回大会発表論文 288
- 石野陽子・清水寛之（2009）. 青年の結婚観・子育て観に関する調査研究 日本発達心理学会第20回大会発表論文集 627
- 厚生労働省大臣官房統計情報部（2006）. 平成17年人口動態統計月報年計（概数） 厚生統計協会
- 厚生労働省大臣官房統計情報部（2009）. 平成20年人口動態統計（確定数）の概況 厚生統計協会
- 厚生労働省・文部科学省（2007）. 大学等卒業予定者就職内定状況等調査 厚生統計協会
- 総務省（2005）. 人口動態調査 総務省統計局
- 中華人民共和国国家統計局人口与就業統計司（2006）. 中国人口統計年鑑 中国統計出版社

